

## 【資料】

# インド・マハーラーシュトラ州動物水産科学大学 野生生物研究・研修センター等主催 国際会議 WILDCON-2020 参加録

浅川 満彦

酪農学園大学 獣医学群 獣医学類 医動物学ユニット／野生動物医学センター WAMC

## はじめに

インド共和国のマハーラーシュトラ州は、大都市ムンバイ（旧ボンベイ：最近では、映画産業で有名）が州都で良く知られるが、野生動物医学分野でも注目されている。この州の古都ナーグプルにある動物水産科学大学には、野生生物研究・研修センターがあるためである。この古都はインド亜大陸のほぼ中央に所在するが、野生動物医学の中心地でもあるわけだ。一方、インド共和国でも、日本同様、毎年、野生動物医学会の年次大会が開催され、2020年で14回目となる。しかし、COVID-19のため、オンライン（遠隔）形式とし、オンラインならばと国際会議になったのだろう。国内であっても使用言語が英語なので話が早い。国際会議の名称は WILDCON-2020、副題は「保全活動への挑戦：野生生物のコンフリクトと救護リハビリテーションへの視点」、会期は2020年12月18～20日、ビデオ会議サービス ZOOM を用いるという（図1）。

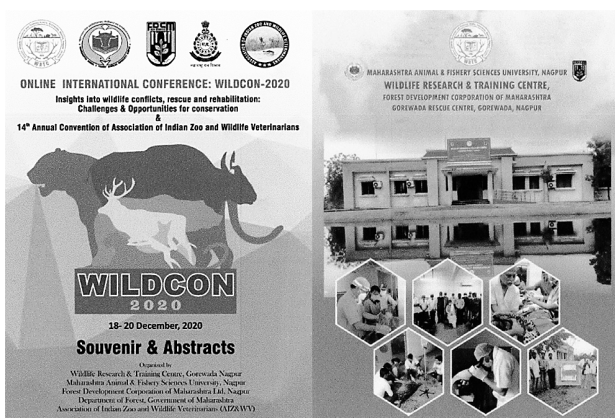


図1. マハーラーシュトラ州動物水産科学大学野生生物研究・研修センター等主催国際会議 WILDCON-2020 講演要旨集 PDF 版の表紙（左）と裏表紙（右）

この会議の案内は開催の約1週間前、ロンドン大学（王立獣医大学校 Royal Veterinary College）大学院とロンドン動物学会 Zoological Society of London とが共同開催

する野生動物医学専門職修士 MSc Wild Animal Health 課程修了者へ配信されるメーリングリスト上で知った。私は、常々、北海道庁・北海道獣医師会指定〈野生傷病鳥獣受診動物病院〉を兼ねる野生動物医学センター（WAMC）へ搬入される救護個体の状況紹介をしたかったので、これを好機とした。さっそく、参加費の10米ドルを支払うため、指定された銀行口座の海外送金を試みたが、参加費よりも10倍以上の手数料がかかる上、指定日までに受領される確証はないとのこと。そこで、オンライン決済サービス PayPal を設けるよう大会事務局に打診したら、あっさり設けられた。このあたりの対応を見ても、取ってつけたような国際会議を想像していたが、参加してみて中身がとても充実していたことを確認した。インド共和国の野生動物医学の一端を把握頂くため、その概要を示したい。

## 会議の規模と予定外の口頭発表

セッションは次の6つに分かれた：①基調講演、②野生動物による軋轢と救護リハビリテーション、③健康と管理、④動物園生物学と保全、⑤保全バイオテクノロジーと法獣医学、⑥ポスター。①と⑥を除く各セッションでは、当該の話題に関わる招待講演が冒頭に2～8本程用意され（15～30分）、その後一般講演群が構成された（4分）。一般講演はリアルタイムの口頭発表となり、②の演題数は27、以下、③138、④45、⑤35、⑥37、これらに基調・招聘講演を合わせ約300の演題が扱われた。全てについてチェックしたところ、一般講演（ポスター含）はほぼ全てがインド国内からのものであり、日本人と考えられる氏名は私以外見当たらなかった。会議終了後、大会事務局から690名の参加者に発行したという参加認定証明書が送付された（図2）。この証明書が不要な政府関係者、招待講演者、会議を運営したマハーラーシュトラ州大関係者（図3）などを併せれば計1,000名くらいで、北海道獣医師会大会をやや下回る規模であろう。



図 2. 国際会議 WILDCON-2020の参加認定証明書



図 3. 国際会議 WILDCON-2020の開会式で政府高官等招待者に講演要旨集冊子版が授与された様子

副題から見ると、この会議は野生動物との軋轢と救護が基軸であり、直結する②セッション開始も大会初日に設定されていた。一般に、野生動物と獣医療となれば、軋轢や救護となるのは、日本もインドも同じなのだろう。招待講演者も豪華で、その1人は香港海洋公園のPaolo Martelli獣医師が登壇されていた。話題は香港周辺地域における野生サル類等の避妊事業についてであった。アジア保全医学会 AACMの年次大会では様々な動物を対象にした臨床獣医学の華麗な話題で聴衆を魅了したが、水族館外でも作業をしているようだ。感激して、ZOOMのチャット機能に「楽しみにしているよ」と送った(図4)。それに対し、(彼からではなく)大会事務局から「これはProf. Asakawaか?」と来て、当方から「そうだよ、調子はどう?」と返すと、「この講演が終わったら、お前の番なのでスタンバイしろ!」とのこと。

冒頭述べたように、②はこの大会の目玉、肝となるセッションであったが、演題が思うように集まらなかったのか、動物学部教員によるミツバチ飼育管理の演題まで編入していた程、セッション中最少演題数となった(前述)。その中で、私の発表は、まさに②のど真ん中なので(図5)、ここに編入されたのは目論見通り歓迎である。し

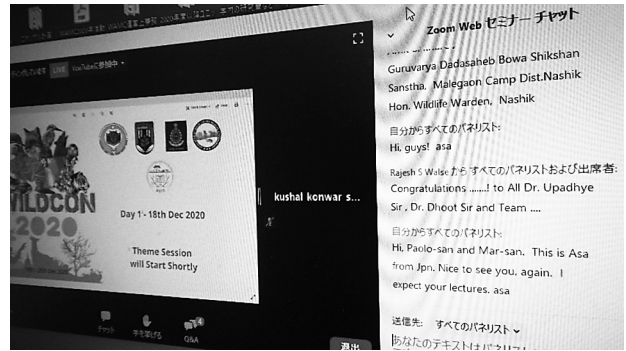


図 4. 国際会議 WILDCON-2020の ZOOM チャット機能にメッセージが表示された様子

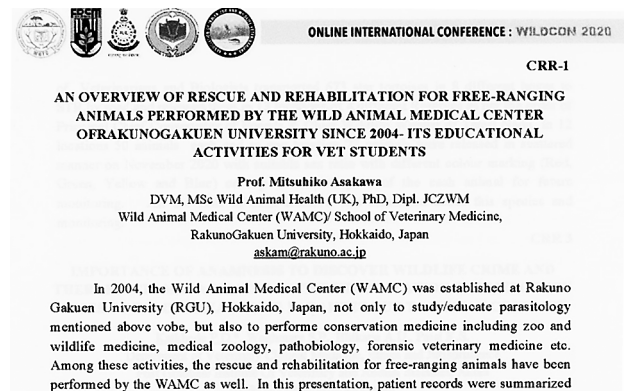


図 5. 国際会議 WILDCON-2020での私の演題要旨(抜粋) 右上「セッション“Conflicts, Rescue and rehabilitation”の略CRRの1番」に配置されたことを示す

かし、エントリー時、既に口演申込み締め切りを過ぎており、駄目元で⑥のポスター・セッションで申し込んでいた。ここからは私の想像だが、大会事務局としては、目玉セッションに関連演題が少なく、加えて、数少ない国外参加者に花を持たせる配慮も働いた。そこで、私の演題は一般講演にし、しかも、セッション・トップに配置したのだろう。少々唐突過ぎで、しかも、演題は急ごしらえであったので躊躇したが、断る雰囲気ではなかった。こういったことは、対面形式に比べ、フットワークがより軽いオンライン形式ならではの諦め、4分間を何とかやり過ごした。

### 「健康と管理」のセッション

この会議では、各セッションの招待講演では、少なくとも MSc Wild Animal Health 課程修了者が2名登壇していた。その1人は、こちらもアジア保全医学会 AACMの年次大会でアジアゾウの医療について教育講演などをされる Khyne U Mar 博士 (IUCN アジアゾウ・スペシャルグループ) で、基礎獣医学セッション④にて母国ミャンマーのアジアゾウを対象にした保全研究を紹介された。

もうおひとりは元エディンバラ動物園のRomain Pizzi博士（ノッティンガム大学）で、動物園動物の病態・臨床・予防獣医学セッション③で、腹腔鏡を活用した侵襲を最小限にした手術法について講演された。このセッションの演題数は最多で、しかも、これに入りきらなかった演題はポスター⑥にまわされた程であった（私の演題が入り込む隙間はない）。以上を併せると病態・臨床・予防関連演題数は約180となる。なお、当該セッション・タイトルの「管理」は健康管理を意味し、たとえば、獣医学教育モデル・コア・カリキュラム『野生動物学』における保護管理ではない。

### 「保全バイオテクノロジーと法獣医学」のセッション

WAMCの活動が活発化するにつれ、動物病院構内に設置されたこともあり、傷病個体が持ち込まれはじめ、次第に、野外で見つかる野生動物の死体も搬入され、大量死や不審死などで発生した死体の死因解明して欲しいという依頼も増えた。死因解明の本来業務は獣医病理学が担っているが、野外で見つかる死体の多くは、死体現象による腐敗・変性が著しく、加えて、他の動物に食べられるなどして体のごく一部しか残っていない場合もあった。そうなると、病理解剖の対象外として門前払いされることが多いようで、最後にWAMCを訪れるということが続いた。そのためにも、人医療で発達した法医学的手法導入の必要性が切実に感じていたので、このセッションには期待していた。実際には、前者の保全関係が多く（なぜか、寄生虫学関連も含まれていた）、後者Forensicsは数題であった。それでも示唆的なものが多く、法医昆虫学の応用や希少野生動物の剖検事例などが扱われていた。また、この発表をした研究者がWildlife Forensicsのような研究室名称が複数あり、彼の国の後塵を拝したことも確認できた。

### おわりに

要旨集表紙に記された標題に“Souvenir”とあり、その意図が不明であったが、この巻末に主催機関マハーラーシュトラ州動物水産科学大学野生生物研究・研修センターのリーフレットが掲載されており合点がいった。これは表裏カバー含み20頁の構成で、このセンターを訪問したVIPとの集合写真、野生救護個体の収容・輸送・健康管理等の状況、これを用いた研修、新施設・大型機器の紹介、公開講座等のポスター、関連の新聞記事の画像で構成されていた（図6）。

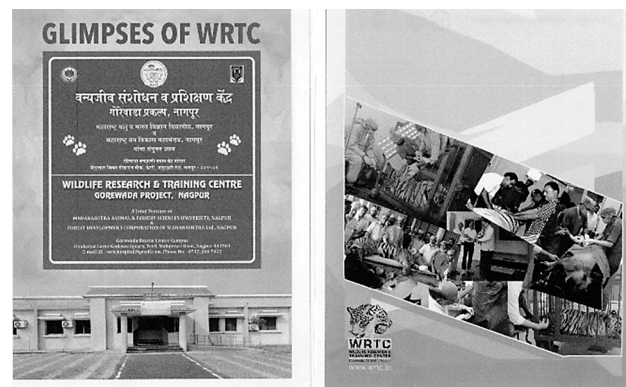


図6. 国際会議WILDCON-2020講演要旨集末尾に掲載されたマハーラーシュトラ州動物水産科学大学野生生物研究・研修センターのリーフレット表裏カバー

これは参加者にとって、この施設の性格を一瞬で把握できる「お土産」でもあろうが、当該センター関係者にとっては情宣する最大の機会でもあったろう。実際、このリーフレットが配される部分は、日本の学会・研究会では協賛企業の広告が入る場所であるが、そのようなものは、一切なかった。このことは、この会議は、ほぼこのセンターが丸抱えして開催したことの証左でもある。当該センターの活動が多様で活発であることが推し量られたが、それにも増して、その活動を獣医療関係者等に訴えかける苦勞が心に響いた。WAMC運営でも参考にしたい。